

北 支

入隊、春眠曉に破る、別れ

岐阜県 後 藤 行 男

入 隊

歎呼の声や万歳万歳の声、そして軍歌の合唱に送られて中津川駅のホームを滑るように発車した列車の窓から、上半身を乗り出して見送りの人々に答えるように、寄せ書きの日の丸の国旗と手を振りながら、人波がみるみる小さくなって行くのをぼう然と見ていた。何とはなしに涙がにじみ出てくる。

真つ白な恵那山も左へ左へと移動していく。線路近くの田圃の畦で手を振りながら見送っていてくれる人の中に見知りの娘さんの顔もあった。窓辺に寄せ書きの国旗を立てて、その陰に顔をうずめて涙を隠し、そっと服の袖

で目頭を拭く。もう二度と恵那山を仰ぎ見ることもあるまいと思う。昭和十七年一月三十一日の朝のことである。昨夜の門出の宴席も、親父なりの精いっぱい散財で盛り上がり、夜遅く散会した。

駅前に整列したとき、在郷軍人会長の間中尉が「御国のために死んでこい」と今も忘れない訓辞があった。昨夜招待した三人の娘さんは、汽車に乗り込んで多治見駅の辺りまで送ってくれた。また名古屋駅のホームには、名古屋に嫁いでいらしたわかれの先輩であり、友だちでもあった竹内延子先生がわざわざ面会に来てくださった。感激でした。去る数年間、先生の下宿に押し掛けていつて夜の更けるのも忘れて議論したこと、一緒に汽車に乗換え時間の束の間の未練の残る面会でした。

その夜は岐阜市内の山形屋という旅館に泊まる。かつて岐阜護国神社の造宮の勤勞奉仕にきた時もこの宿に泊

まったことがある。

役場の兵事係から明日の入営の予定の指示を聞いて床に入る。いよいよ明日からは自由の許されない身になること、御国のためという大きな任務に向かって邁進しようと思う。過去のことから次へと思ひ出されて、なかなか眠れない。数年間にわたってお友だちであり、また初恋の人でもあったAちゃん、今思えば、もっと積極的な行動にでるべきだったような気がする。いやどうせ生きて帰ることの叶わぬ身、美しい思い出だけを残してきて良かったとも思う。

最後の別れの夜、固く抱きしめたい気持ちを必至にこらえて、固く握りしめた手の暖かい温もりがよみがえる。娑婆での最後の夜は、意外と寝つかなかった。

二月一日、いよいよ今日は未知の世界、軍隊への入隊の日である。衛兵の立つ宮門を入るとき、異様な不安と興奮を覚えた。各中隊への臨時配属、衣服、兵器の支給、食事の準備、点呼、寝具その他の取扱ひ、われわれが予想したり先輩から聞いてきたのとは大違いばかり、そしてもっと驚いたのは、この六十八連隊は仮入隊で、準備

ができ次第、外地の部隊に入隊すること、即戦地とは思ってもみなかった。

入隊して六日目の朝、班長が「今日は皆のものと家族との面会日である。午後一時から一時間の間に宮門前で各自面会せよ」と指示があった。兵事係の方から、留守宅に連絡してあったらしい。果たして面会に来てくれるのか、また、だれが面会に来てくれるのか心配しながら面会場へ行った。親父と姉と弟の三人が面会に来てくれていて嬉しかった。

何かの都合で面会人の見当たらない兵も何人かはいた。何を差し入れされたか、どんな話をしたかは覚えていない。入隊するとき着てきた私服を持ち帰ってもらった。

親父は面会を終わって宮門を出ると、大粒の涙をぼろぼろと落とし「行男はもう生きて帰るまい。これが最後だと思う」と姉たちに泣いて語ったと、終戦後、姉から聞かされた。当時の紀元節二月十一日の朝、岐阜聯隊を出発した。

春眠曉に破る

「敵襲、敵襲、全員武装して各舎内に整列」、週番下

士官らしい人の声で目を覚ます。うす暗い石油ランプの光の中で、皆飛び起きて寝具を整頓する。今まで寝ていた自分の体温とはのかなオンドルの熱が、毛布に残っていて心残りだ。つい先程寝ついたばかりのような気がして実に眠い。

しかしそんなことは言っていられない、狭いので隣の人をお互いに邪魔にしながら武装をする。鉄帽のかぶり方もまだ正式には習っていない。

教育助手の上等兵が「どんな風でもいいから頭にかぶれ」とどなる。二月十一日に岐阜を出発して、ここ北支の山西省靈邱県の独立歩兵第十二連隊第二機関銃中隊に来るまでに約半月。まだ軍人になりきっていない時の出来事、まして完全武装などしたことがない大部分の者が、薬ごうなど付けた経験がなさそうだ。適当にお互いが見合いながら、何とか武装をし、小銃を手に整列が終わった。狭い民家を改造した十二、三人が寝起きするのにやつの広さの兵舎である。

三月初旬、まだまだ寒さは厳しい。内地の寒さとは格段の違いで、夜明けまでまだ相当間のある三時ごろ、外

は月もなく真つ暗闇。二年兵が二人小銃弾を運んできて「全員薬ごうの蓋を開ける」、それぞれ黙って薬ごうの蓋を開ける。二年兵の一人が小銃弾を一〇発ずつ薬ごうの中へ入れていく。

われわれ第二教育班の一二人の初年兵全員に弾薬が配られると、上等兵が「命令があるまで絶対に弾薬は銃に装填してはいかんぞ」と注意がある。大方の者が弾薬の装填など知らない。班長の荒木軍曹がきて「只今から非常配備に付く。暗いからしっかりと俺についてこい」、教育上等兵を最後尾に暗闇の舎外へ、他の兵舎からも人の動きがする。

周囲約四^きの城壁の上へ、ここ靈邱へ来て初めて上った。高さは十数^た層もあるうか、城壁の上から城外を見下ろすと、広々とした大陸を窺わせる荒野が星明かりで想像できる。

この城壁内には第二大隊の本部と小銃隊一個中隊、それと我々大隊砲を含む機関銃中隊が駐屯している。班長が小さな声で「各々一〇分間隔に展開せよ」と命令を下す。それぞれ黙々と闇の中で間隔をとる。全くの孤独を

感じる。

その時、城外五、六百坪の彼方で銃声、暗闇の中に銃火だけが無気味に光る。いよいよ敵襲である。我々初年兵はなす術もない。少し時間をおいて、味方の重機関銃が火を吐いた。心強い連続音である。敵も重機の音。この時から戦地へ来たのだなという自覚と、いつ命が終わるか分からないと思う恐怖が全身を引き締めた。

もとより天皇陛下に捧げると誓ったはずのこの命、めめしい振舞いは許されない。しかし、だれもが命を失いたくない気持ちに違いない。

これから毎日のように身の危険にさらされるのかと思うとやりきれない。時々双方で銃声が続く。東の空が少し白んできた。城壁の外の様子も目のなれと共に、林、民家などの輪郭が徐々にはっきりしてきた。城壁内の様子もこの高さから見れば一目で分かる。

突然、城壁内の中央にある望楼の辺りからラッパが鳴り始めた。よく聞いていると入隊前にどこかで聞いたことのあるラッパである。在郷軍人や青年学校の大演習の終わりに聞いたことがある「演習止め」のラッパである。

早朝からのこの出来事は演習であった。そして弾薬を返納するときに、よく見ると配られた弾丸は全部真鍮製の擬製弾であった。本当に敵襲とばかり思い込んでいたので、やれやれという気持ちと、なんだか一杯食わされたような気持ちとで複雑であった。

兵舎に引き上げてから、今日は三月十日陸軍記念日であることを知らされ、初年兵がいかに軍務だけに頭を使い、他のことを考える余裕のないことを思い知らされた。ちなみにその日の朝食には、この地に来て初めて尾頭付きのご馳走がでた。かくして三年九か月の軍隊生活の、いや戦争参加の体験の第一歩が始まったのである。

地雷におびえながらの幾日も幾日も続く夜行軍、タバコとマッチを鉄帽の中へ入れ、首まで水に浸かっている渡河、空腹で倒れそうになりながら葉を食いしばっての強行軍、遮蔽物の何もないところでの山頂からの機銃攻撃、思い起こせば苦しみの連続のような軍隊生活、そしてその苦しみの中に少しは楽しいこともあったが、その大部分は努力と忍耐の連続であった。はるか彼方に延々と続く万里の長城のように。

立ち並ぶ墓標の前に額づきて

五年前の激戦を偲ぶ

この歌は、北支の山村で一個小隊が全滅したときのもの、戦地から故郷の先輩を通じて、文芸春秋に寄稿したもの。

別　　れ

入隊してから一年以上がたった。初年兵が入ってきて教育助手として張り切っていた時のある日、中隊長から呼び出された。直接我々兵が中隊長に呼ばれることはまずない。何かと中隊長室を訪ねると、中隊長はおもむろに「実はお前の父親は、今年四月の初めに病死したと連絡があった。気の毒だが、この北支の山奥から帰るわけにはいかぬ。今日から三日間休暇をやるから、休養しながらお父さんの冥福を祈ってやれ」と。驚き以外の何ものでもなかった。入営するとき、あんなに元気だったのに、あれからたったの十四か月、私の奉公に支障があったとは氣遣って、病氣になったことも、死んだことも知らせてくれなかった家族の心情が痛いほど身にしみた。だれもない兵舎で、一人床にもぐり込んで止めどもな

く流れる涙をどうすることもできなかった。

岐阜の宮門前での別れが、今生の別れとなった。

父の予言は逆の目的中し、この世で会うことはできなくなった。思えば哀れな別れでもあった。後日分かったことだが、父が亡くなる四か月前の昭和十七年の十二月に、祖父も亡くなっていた。戦争とはいえ肉親二人の死に目に会うことができなかった。留守宅も戦争以上の苦しみを体験したことになる。平和こそがお互いの幸福の最大のものであらう。

出戦務履歴（北支の巻）

神奈川県　萱野　明

屯営生活の一端。時あたかも戦雲激動の年に直面し、日支事変より大東亜戦争に突入、皇軍は各地に転戦、国力を挙げた大戦となった。この度は出戦務履歴として北支転出の出陣記とする。

昭和十七年四月十日、現役兵として東部第三部隊佐藤